

## 彗星だより

**1927 e 彗星後日譚** この彗星発見の時分の様子は前號に誌した通りであるが、その後の雑誌なり回報には発見者として只ハーグリーブ氏のみが上げてある丈である。獨立発見なら兎も角、発見者が二人あるといふことは讀者も定めし不審がられると思ふがその間の詳しい消息が近著のネーチュア誌に載つてゐる。

それによるハーグリーブ氏（この人は英京ロンドンのキングスワードにゐる人）が3月27日28日兩日に彗星の寫眞を取つたけれども餘り星の像が微かであつたので見出せないでゐたのをマートン氏が発見したといふ譯なのである、さてこそハーグリーブ、マートンの二人の名前が上げられてゐることが理解せられるであらう。尙ほ面白いことはハーグリーブ氏が撮つた寫眞玉は飛行器用寫眞レンズであつたことである。この発見をアメリカへ知らせた時分にヤーキースやハーグリーブ天文臺ではそれを認めることが出来なかつたといふことは前號に書いた通りであるが小さな飛行器用の寫眞レンズがアメリカの大望遠鏡を打ち負かしたといふ譯で英國では鼻高々の様子である。實は自分もそんな飛行器用寫眞レンズが兼ねがね欲しいと思つてある筋を辿つてゐるのであるが未だに手に入れることが出来ないのである。

この彗星の軌道要素はマートン氏によれば次の通りである。

T	1927 5 月10.245 萬國時
$\omega$	355° 1' 48''
$\Omega$	215 32 1
i	17 29 18
e	0.69256
q	0.89265

地球に最も近づくのは6月初めで、この雑誌が世に出る頃には段々遠ざかつてゆく頃である。相當大きく且つボンヤリしたもので位置を正確に計るのは困難である。この軌道要素の近日點通過は5月10.245 萬國時で最初に豫報した10.34 といふのと殆んど一致してゐたことは大にマートン氏の爲めに慶賀に堪へぬことである。

尙ほ前號に報じたところのウツクル天文臺で寫眞板に寫つてゐたといふのはウ

ツのものであるらしい。

**1927 d 彗星** 前號に誌した如く近日點通過の時刻に大分大きな開きのあることはこの彗星の近星點距離が可なり大きなもので然も近日點附近で觀測せられたことによるのであるが、先日到着したハーグリーブ天文臺のハガキ通報によるパークレイ天文臺のテーレ (H. Thiele) 氏が計算の結果周期彗星であることが知れた由である。それは、ヤーキース天文臺のグンピースブルク氏の3月13日の觀測及びリック天文臺のマクスウエル氏の3月26日と4月5日の觀測からこの彗星の軌道要素を計算して次の結果を得たのである。

T	近日通過時	1927年3月 20.02161 萬國時
$\omega$	近日點引數	10°36'11.75
$\Omega$	昇交點黃經	214 35 43.2
i	傾斜角	87 32 21.0
e	橢圓率	0.991805
q	近日點距離	3.6802

しかも檢算の結果より觀測と一致してゐることが知れてゐる。

この軌道要素と前號記載の分とを比較して見るにストロムガレン氏が單獨に計算した値とよく近似してゐることがわかるであらう。

この彗星は觀測によるごくハツキリした一寸普通の恒星の様に見へる核を有してゐることが知られるのである。

**シヨウマツス彗星** この彗星は最初11年11月30日 シヨウマツス氏によつて発見せられたもので、次には1919年に出現し10月29日同人によつて再び発見せられたものである。今年は11月19.1日に近日點を通過するといふクリップス氏の計算が英國天文協會年鑑に出てゐたが（自分は本會年鑑には11月16.9日 といふ日附を採用して搜索表を計算して置いた）、マートン氏によるとそれよりは餘程早く10月1日頃に近日點を通る豫定だといふことである。若しさうならば、いくらか早く発見せられる望みがあるといふものだが只太陽に近くなるといふことで却つて発見に都合が悪くなるのである。この次の出現期には餘程條件が悪いから是非今年発見せねばならむといふ筋合である。

(1927 6 6 上田)